

寄稿

チェコの芸術教育とこぐま座の未来へ

人形劇師・演出家 沢 則行

こぐま座開館50周年、おめでとうございます！

自分はただの芝居屋で、立派なことは書けない。でもこぐま座ややまびこ座の未来をいつも思う…自分の体験が何かの役に立つかも、なので少しのあいだお付き合いくださいm()m

ヨーロッパのチェコに住み始めて35年になる。自分の娘が小学校に入学したとき初めて知ったのだが、彼らちびっこはこんな一日を過ごす。まず午前中、日本と同じような科目の授業を受ける…国語算数理科社会体育などなど。で、お昼になると学食に行く。同じ地区には必ず学生レストランがあって、小学生から高校生までいっしょにランチを食べる。あらかじめサイトで選んだメニューがひとりひとりのICチップ付き学生証に登録されていて、レストランの入り口で読み取り機にタッチすると、ニコニコまかないおばちゃんたちがコースディッシュを出してくれる。食べ終わったら、午後からその地域にある公立芸術小学校(「ザークラドニー・ウムニェレツカー・シュコラ」という名称で、訳すと「芸術表現のための基礎教育学校」かな)に行く。この学校はもちろん全国にあって、それぞれ音楽、美術、演劇など、柱となる芸術分野を通して、基礎教育をおこなっている。公立だ。だから学費は無料。でも簡単な入試はある。「さあ、マリエちゃん、好きな歌をひとつ歌ってちょうだい、何にする?」という歌唱テストから始まって、ピアノの単音を発声する音感確認、先生が打つ手拍子を繰り返すリズムの試験と、ごく簡単な実技試験を受ける。娘は歌とピアノを専攻した。試験の数週間後、幼稚園の生徒たちは連れ立って再び学校を訪れ、現役小学生たちの演奏発表を聞く。そして、ピアノ、ヴァイオリンなどの弦楽器、フルートなどの管楽器から好きな分野を選択し、入学と同時に実習が始まる。試験をしてくれた先生にたずねたところ、いわゆる音痴でも不合格はないそうだ。ただし楽器選択に制限が加わるとのこと。音階をうまく聞き取れない子がピアノやヴァイオリンを学ぶのはむずかしいようだ。

以前から、プラハの芸大入試の試験監督をしていて、来る学生たちのほとんどが何かひとつぐらいは楽器演奏ができることを不思議に思っていた。まあ芸術系を志望するのだからそれぐらいは当たり前なのか、でも小さな頃からレッスンを受けさせているとしたら、親の出費もたいへんだなあ、ぐらいに考えていた。しかし自分の娘の進学を通して、チェコ人の多くが十数年にわたって音楽や演劇の基礎訓練を公立の学校で(すなわち税金で)受けているのだということがわかり、合点がいった。この仕組みは、モーツァルトの時代から音楽や芸術に敏感なチェコの民族性に加え、社会主義時代に敷かれたほぼ完全な男女雇用均等の体制に合わせて、共働きの夫婦のために国がシステム化したものらしい。夕方まで働く夫婦の負担を軽減するためだ。実は芸術小学校が終わった夕方から、学童保育の公立小学校もあって、先生たちがついて、宿題をやったり絵を描いたりして子どもたちは親のピックアップを待つ。ヨーロッパのほとんどの国では親が子どもの登下校を送迎する。これに合わせて幼稚園や小学校の受け入れ時間も朝六時半から八時半、下校のためのピックアップも午後三時半から五時半までと、一定の時間幅が設けられている。

長々と書いたが、こぐま座に話を戻そう。

劇場を創立したのは日本の人形劇の草分けでもある加藤博(かとう・ひろし)さん。その跡を継いで、やまびこ座館長となった天才・岩崎義純(いわさき・よしずみ)さん。そして、今、生命をかけて奮闘している両劇場の芸術監督・矢吹英孝(やぶき・ひでたか)くん。

さまざまな賞を取り、人形浄瑠璃あしり座の代表をつとめ、劇場の国際交流やツアーもプロデュースしているが、彼のほんとうの凄さは子どもたちのために働きつづけられる根性と体力だ(昭和だw)。

さまざまな賞を取り、人形浄瑠璃あしり座の代表をつとめ、劇場の国際交流やツアーもプロデュースしているが、彼のほんとうの凄さは子どもたちのために働きつづけられる根性と体力だ(昭和だw)。

2026年夏、7か国の子どもたちと大人が集まって、矢吹プロデュースで「ブレーメンの音楽隊」を作る。

彼が30年以上にわたって育ててきた人材は数百名。小学校3、4年生だった子ども人形劇団が教師や保育士となった今も人形劇を続けている。就職して劇場スタッフになった者もいる。そこから大人も含めて100名近い強力なメンバーを集めた。

いろいろな国で仕事をして来たが、こんなことができる街を見たことがない。こぐま座もやまびこ座も週間の稼働率は100%を超えるのだ。

だが一方で、沢は勝手に今が、ココから「劇場」の正念場だと思っている。

子どもの数が減り(そもそも日本は毎年90万人減り続けている)、観客動員数がどの小屋でも落ちていく中、サブスクよりナマの人形劇を観るためにわざわざ地下鉄に乗って劇場に行こう!という奇特な観客をどう育てるのか。スマホゲームをコントロールするその子の手を一瞬止めさせて心を奪うあたたかい衝撃をどう創り出すのか。そして人々が集うそういう舞台文化が社会に必要不可欠なのだという認知をどうプロモートするのか…

自分はそのヒントが前述のチェコの芸術小学校にある気がする。芸術教育を通して子どもたちをはぐくむ役割を人形劇場が担えないだろうか? というか、とっくの昔から、例えばこぐま座と中島児童会館の職員たちが、汗と涙の努力でその役割の一端を担ってきたのではないかと感じて来た。ならば、それにちゃんと行政の予算と人員を加えて恒久的に機能させることはできないものだろうか?

放課後か、日によっては午後のカリキュラムから、子どもたちが劇場に集い、いっしょに芝居を作り、音楽や演技を学び、発表会をする。親たちや地域のお年寄がいっしょに観て笑う…おろかな夢ではないだろう。100年近く実践している国があって、自分はそこに住んでいるのだ。

世界に出てゆく日本の若者たちを応援したい。どこの国でも自由にディベートしたり、堂々とアイデアをプレゼンできるように育ててあげたい、そう思いませんか? 自分はその役目を果たさせるのが子ども人形劇場だと思っている。

沢 則行 (さわのりゆき)

北海道小樽市出身。プラハを拠点に世界20ヶ国以上で公演、また、チェコ国立芸術アカデミー演劇・人形劇学部を始め、多くの教育現場で講座、ワークショップを行う。

ヨーロッパ文化賞「フランツ・カフカ・メダル」授与、EU文化都市賞など、国際的受賞多数。日本国内では、NHK『みんなのうた』映像制作、『SWITCHインタビュー達人達』出演、東京オリンピック・パラリンピックの公式文化プログラム「東京2020 NIPPONフェスティバル」〜巨大人形プロジェクト『モッコ』の人形デザイン設計および人形製作操演総指揮を担う。北海道大学客員教授。



写真/ Youhei KUBOTA

ひらけごま!

【第2回】～親のこれからを共に考えるの巻～

約20年前、50代だった母は、介護保険制度が未整備時代から自宅で介護した実父の病院での看取りをきっかけに起業し介護施設をつくった。約3年前にこの会社を引き継いだわけだが、今は私の父が介護保険制度を利用しながらデイサービスに通っている。母より6歳年上の父は、約2年前から運転が危うかった。スーパーに停めた車の位置が解らなく、雨の中、母の話も聞かずに、ずぶ濡れになりながらみつめたというエピソードを聞き、父の変化を知った。人の話を聞かないだけでなく、どこかイライラする姿が増えてきてもいた。家族会議が開かれ、家族の様に心配してくれた職員が第三者として父に「車は車検にだしました。」という体で、物理的に車を無くした。父の財産整理は“認知症”という診断がつく

前に「できる時にしよう」という母の声かけに重い腰を上げ、司法書士の先生の前でしっかりことを伝えてくれた。と同時に平行的に、脳神経外科へも受診した。私は車の運転手役として同行し「なんでおまえが居るんだ」と言われても、「心配だからさ～」の返答に父は笑顔で返してくれるので、まんざら嫌でもなさそうだと2か月に1度の習慣となった。そして、今年「アルツハイマー型認知症」と診断がついた。その頃に母は、短期記憶が無い父との生活に疲れていた。母のレスパイト（休息）も必要だということで、デイサービスに繋がるのである。母とはよく「これからどうしたいか」「最期をどう過ごしたいか」と会話する。子どもができることは、会話できる時に、想いを聞きそれをしっかり心に貯めておくことだ

など、まだまだ続く彼らのこれからと共に考え生きたいと思うのだ。



高齢者施設にてサンタ業を行う父の背中

深澤 梨恵(ふかさわりえ)

1985年札幌市生まれ。2009年9月より、札幌オオドリ大学 学長として活動をスタート。2012年9月にNPO法人化。2020年1月に株式会社ひらいてつくるを設立し、現在は通常の事業所や企業で働くことが困難な方に、就労機会や生活活動機会を提供する就労継続B型事業所オーブンドアを運営中。2023年9月に母親が立ち上げた介護施設を運営する有限会社アイを承継。仲間と家族に支えられながら日々を暮らす三児の母。

思ひ出
えほん手帳

第2回

オムライスと
『まどそうじやのぞうのウフ』

私が初めてとろとろのオムライスの存在を知ったのは伊丹十三の映画「タンポポ」だ。老舗洋食屋たいめいけん考案のオムライスで、チキンライスの上に半熟のオムレツがのっている。オムレツをナイフで切ると、とろりと卵が流れるのだ。衝撃だった。それまではケチャップで炒めたごはんを卵で巻いたのがオムライスだと思っていた。それだってけっこうなご馳走だ。それなのに、こんな洒落たオムライスがあるなんて。あの頃からだんだん新しい食べ物が紹介されるようになり、世界中の料理を食べられるようになった。今ではちょっと都会に出れば、各国の料理を食べることができる。贅沢でありたいことだと思う。でも、あの頃の気持ちは消えてしまった。遠い世界のまだ知らぬ料理の写真を見ながら感じた、焦がれるようなあの気持ちは。私も流行りにのっていろいろなオムライスを食べた。けれど、やっぱり薄い卵に巻かれたケチャップライスのオムライスが

いちばん落ち着く。

オムライスではないけれど、「卵」で私が思いつく絵本は『まどそうじやのぞうのウフ』(福音館書店)だ。ウフは青い服を着てぼちぼちのついたスカーフを首にまいているおしゃれなぞう。絵本の舞台はヨーロッパのような外国の町だ。金髪のおくさまが住むカラフルな家々がとってもおしゃれ。ウフはパケツに乗せた自転車に乗って、町の人のお家の窓を掃除する。パケツの水を鼻ですって窓にふきかけ、タオルで丁寧にふく。窓をふいた家のおくさまからお駄賃をいただく。ウフはたくさんの窓を掃除して、夕方に家に帰る。ようやくの夕食。最後のページの文章が衝撃だった。「たまごを ひつつ ゆでて、ごはんを しました。」

白い画面の真ん中には、美しい模様のエッグスタンドに入った卵がひとつ。エッグスタンドはお皿の上に置かれており、小さなスプーンも

添えてある。エッグスタンドの存在もしらなかった私はその可愛らしさにときめきながらも、大きな体のぞうのごはんがたったひとつのゆで卵だということにとっても驚いた。ウフが不憫で仕方なかった。同時にエッグスタンドがかわいくて仕方がない。なんともいえない複雑な気持ち。私がこの絵本を何度も何度も読んで読んだのは、最後のページでこの気持ちを味わうためだったように思う。



かとう まふみ

絵本作家。影絵や人形劇が好きで、自分でも制作する。主な作品に、『ぎょうざのひ』（偕成社）、『しゃもじいさん』『ぬかどこすけ!』『みそこちゃん』（あかね書房）、『ねこきちのてぬぐい』『まんまるいけのおつきみ』（講談社）、『おりがみのしろちゃん』『のりのりこさん』『けしごむのゴムタとゴムゾー』（BL出版）、『おもちゃのかみさま』『よつばのおはなし』（佼成出版）、『かたつむりくん』（風濤社）など。



法要で訪れた親戚の家で、使い込まれた古い国語辞典を見つけました。懐かしい手触り、ページをめくる心地よい音、そして紙の匂い。幼いころ、目にとまった文字を何秒で調べられるかと、ひとり遊びをしていたこと思い出し、退屈している親戚の子たちに伝え、予想以上にはまり、長い法要の時間が少し有意義な時間となっていたようでした。この小さな遊びが温かな余韻として残ってくれると良いなと感じた時間となりました。(柴田)

